



「いくらダークネス化したお前でも
結城リトのことは譲れんな…それは私の下僕だ」

「はあ？最近出てきたキャラが何を言ってるんです？リトは私のものですよ」



[.....]

[.....]



「どうやらこの場でリトの所有権をはっきりさせる必要がありそうですね」

「いいだろう、丁度はっきりさせたいと思っていたところだ！」

「しかし、リトは優柔不断なところがあります…
この人に任せてはいつまでたっても結果が出ないでしょう」

「ではどうしよう、
他の男達を何人が用意してそいつらから多く精液を搾りとれたほうが勝ちだ！」



「どいつわけだ、下僕よご主人様がお前下半身の未来のために身体をはってやる、しばしここで待っている」



「リト、この勝負は私が勝ちます！終わったら休まずSEXし続けますからね？今のうちに精液いっぱい貯めて置いてください」



「や、ヤミちゃんが俺のちゃんぽをいじめてくれるなんて」

「ついでに…汚いおちんぽですね、
リリアの下に吐へて下さい小さいし…」

あし

ビッ

ゴッ



「まあいっか、これは勝負です、
するからには楽しませてもらいましょうー」

「さてさて、恥ずかしい皮をかぶった
「ミちんぼの中身を見せてもらおうかなー？」

ははは

ははは

ニヒッ

ニヒッ

はは



「……はっ、えっ……もう出たっ！」

「……はっ、えっ……もう出たっ！」

グッ

グッ

!!

「はあ…あなたいくらなんでも早すぎ…
これは「三ちゃんぽを通りこしてキモイ」

「良かったですね？勝負だからこんななちゃんぽでもい・ち・お・う！
得点にはなりますが、普段ならちゃんぽ切り落としてましたよ？」

ドロ

ピ

ん

ん

「だって存在価値ないじゃないか…」

「(悲)…なんぞ…なんぞ…なんぞ…なんぞ…なんぞ…なんぞ…なんぞ…なんぞ…なんぞ…なんぞ…」

「こちらも始めるか…お前達分かってているな？
玉の中に入っているものは全部出せ！」

「中途半端に果てたりしたら許さんからな？」

ピョッ

ビョッ

「分かってます…が、頑張らせていただきます！」

「良くぞ言ったな、口だけじゃないところを見せてもらおう！」





「はっ、はっ、はっ、はっ」

カポ

しゅわん

しゅわん
しゅわん

「んおおお！っぞ、そんないきなり！
し、しかも思いつきり吸い込んでー！」

「ちゃんほが取れどつなへんに搾りこきへん」

ぐわん

ぐわん



ビッ

「……がも上自使い……だだだ、射精ちやいます……」

ブポ
ブポ

ブ
ビッ

ハ
ハ
ハ
ハ

「……おんおん……」

ビッ

「……おんおん……」



「ぶはっ、なかなか濃厚な精液だないぞ、楽しくなってきた！」

（出だしは順調だな、このまま差をつけて・・・ふふ、今から結果が楽しみだ！）

ぴんぽん

ギン

お相木

ドロ

ん

ん

「ちよっとお、せっかくこの私がいちばんほじごいてあげてるのよ、
これだけしか出せないとか…」

「なめてるんですか?」

「ぞ、そんなこと言われまじても…」

「まったく、こんなんじゃ負けちゃうじゃない」

セー





ドキ ドキ

「は…ははっ…(汗)」
「ヤ、ヤミちゃんが、こわい」

ズッ
ズッ

おっおっ

んん

……



「それっ……これならどうですっ？」

「はぐらう……うざやあああ、
ちんぽがああちんぽが……」

「別に良いでしょっ……どうせ使っ機会なんてないんだから、
……で全部だしてちやっつけてください」

ぐ

グッ
グッ

グッ
グッ



「ふふ、なんだあ…出さうと思えば出せるんじゃないですか？」

「おはこら、お精をっく、全量出さまへっーん。」

ぐわっ

ドバッ

ぐわっ

ぐわっ



「…手がよこれちやったなあ…
後ろで待ってる人たちがってますね？」

「ロッ」

「びゅっ」

「ドゴボ」

「ん…ん…ん…」

「もし」の人のように私をわすらわせたなら…」



「本気で壊しちゃいますよ?」

「はわやあはわー?」

「ひいいい、わ、わかりましたああああー!」
(ヤミちゃんがドSすぎる…)(…)

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

「ほう、なかなかの大きさだな、毎日女の尻をおっかけているだけの」
「だが見てくれただけではなく、ちゃんとやる」
「とはできるんだぞうな？」

「ふほほっ……心配後無用ですよー！私のムス」
「はまだまだ現役、

朝は特に大変でしてな……毎朝オナニーしてなだめているくらいですよー！
「……」

「ふん、恥ずかしい奴め……いいだろう存分に搾りとってやる、ありがたく思えよー！」



「くっくっくっ、入ったぞー！」

「うほほおおー！個、これは素晴らしい！」

「この狭さー！ねっどりと絡みつく肉壁ー！
女性に拘束されてちゃんぽじがかれてくるムキムキヒーローメンー！」

「これをどうしても最高ですよおおー！」

ヌ
パ
パ
パ



「くっ……くっ……お校長めえ、気持ちよさそうだなあ……」

「おいおい、お前達何を休んでいる？
中に入れなければ射精も出来ないのか？そのちんぽは飾りか？」

「ぐぬぬっ、もう我慢できないー！
ネメミスさん、思いつきりびっかほおせてもらいますかららねー」

「いいぞー来い、私の勝利のためにしっかりと貢献するんだー」



「ぐひよおおお！私のほうも出てますぞおおおー！！
気持ちよすぎで気持ち悪いぞー！！」

「んふうふう、いいぞなかなかの量だー！！
やはり貴様を確保しておいたのは正解だったぞー
(ふふふ、ダークネス…この勝負は私がもらったぞー！！)」





「むむむ…」
 「このままではまずい、まさか校長を確保されているなんて…」

どろ

「仕方ないですね、特別にオマン」を使わせてあげます！」

「わ、わかりました精一杯射精とさせていただきます！」

どろ



「おおおおおーいやはいいんどろとろマン」気持ち良すぎですー！
が、我慢なんてできるわけがないに」

「んう…」
(なかなかの量だけど、校長の射精にはせんせん足りてなとぞ)



「なに…休んでるんです?」

「んっ」

「こんなんじゃせんせん足りないでしょう?」
「あなた達に休んでいる暇なんかありませんよ!」

「うぎーっちゅ、ヤミちゃん今はダメです…!」
「イッたばかりでちんぽが敏感!いいいい!」

ブル

ビク

ハッ
ハッ
ハッ

「ネメシスさんー？あ、アナルにパイプが…」

「ふふふ、狭い膣が圧迫されて更に狭くなっているぞ」

「どっだ突っ込みたくなるだろう？
思いつきり搾りしってやるからな」



「おおっ、では自分から！」

おは

ビュル
ビュル

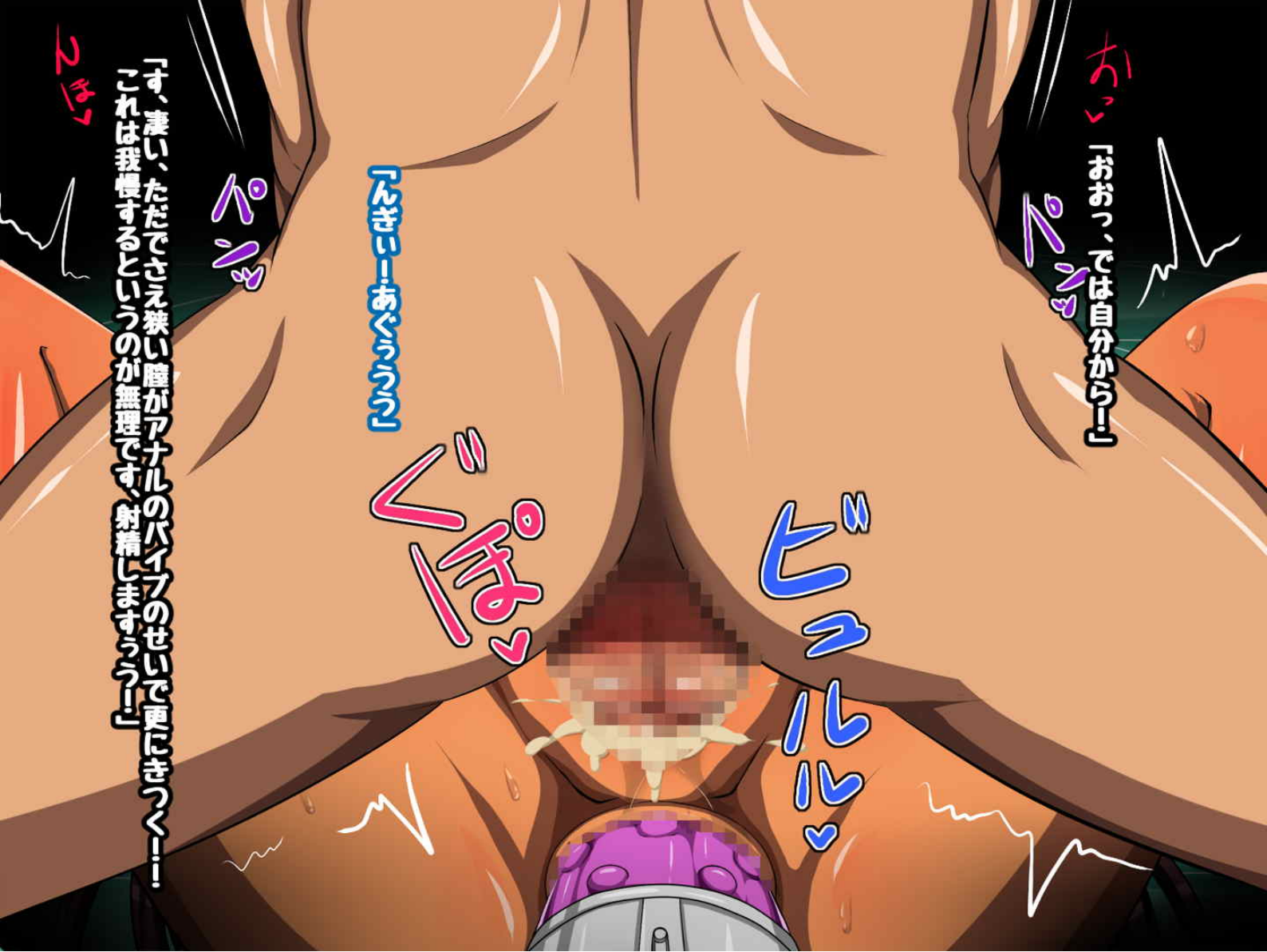
「んぎょーっ、んぎょーっ」

ぐほ

おは

「す、凄く、ただでさえ狭い腫がアナルのパイプのせいで更にきつくて……
これは我慢するというのが無理です、射精しますっうー！」

んぎょ





「もっとダークネスに差をつけねば」

「げほっげほっーいい感じた…だがまだまだ足らん！」

ビク

はー

はー

ズンズン

た

「そつでしような、だからワシが再登場ですッ！
足りない分を出させていただきますぞお！」

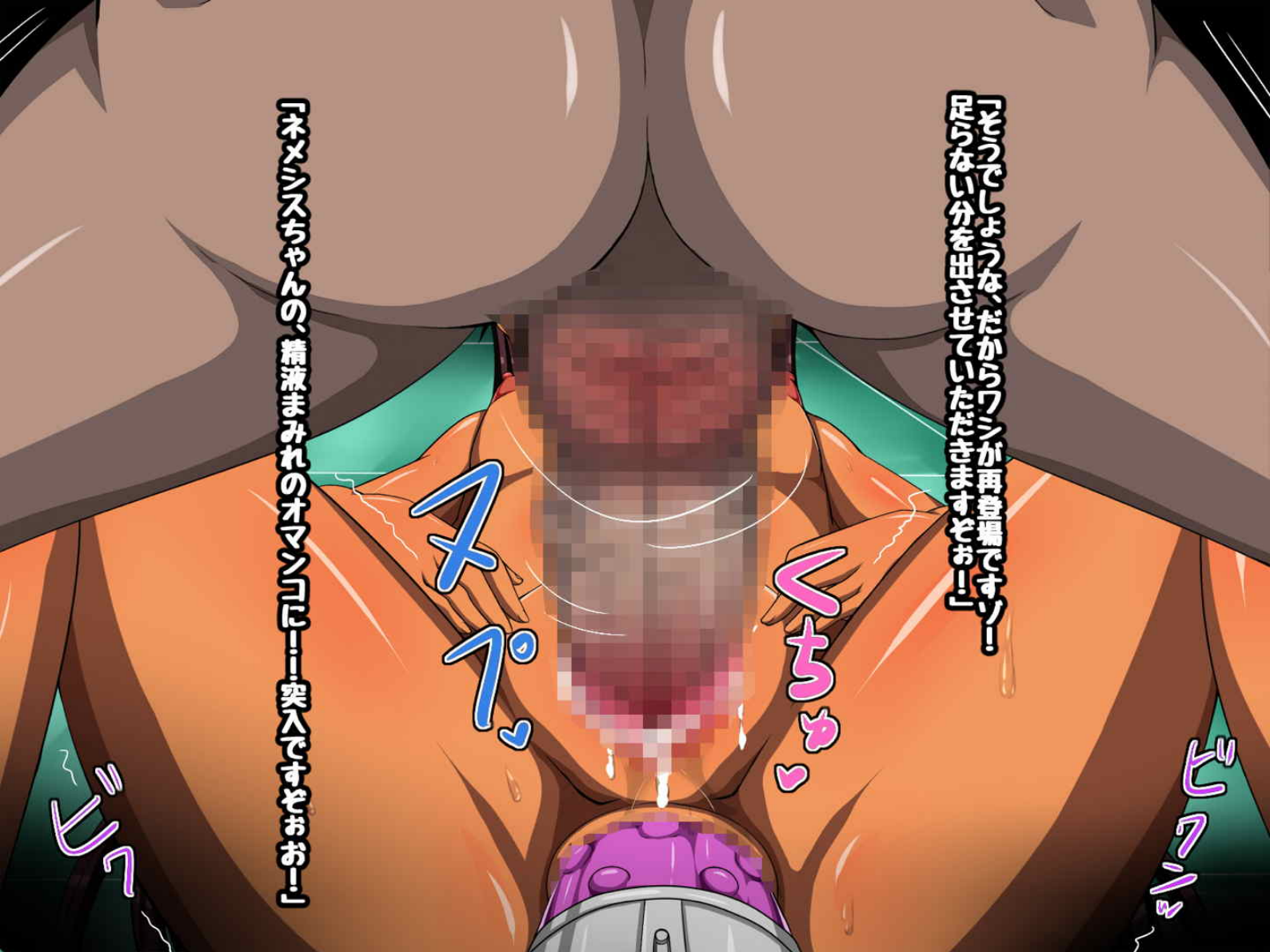
「ネメシスちゃんの、精液まみれのオマン」に「ー突入ですよおー！」

フッ

くちゅ

グッ

グッ



「いっきに奥まで飲み込まれてしまいましたぞー!!
腸内のパイプの振動が伝わってきて実に「こちよいいですなあ」

んぎん

「あがっー? おおほおおー!!」

ビュ

ー

おほおほ

ドスト

「べらう、ネメンスちゃんの子宮がぐいぐい吸い付いて、
このままでは全部吸い尽くされてしまううー!!」



「はあはあ…ふふ、いい仕事だったぞ校長」

「ふうふう、ほめて頂いて光栄ですなあ」

（ぐぬう、予想以上に搾り取られてしまいましたな…
これはしばらく勃ちそうにないですぞ(泣)）

ゴボ

ふりか

じ

ん

ん

ん

ん



「おい！お前、ダークネスのほうの奴に遅れを取るんじゃないぞー！もし遅れをとったらお前の玉を握りつぶしてやるからな！」

「さあ、ラストスパートですよ、しっかり射精してください！あなたのちんぽをハメさせてあげてるんだから！」

ググ

ググ

ググ

ハッ

フッ

ビッ



「じつちまだ、さっきの音しが効いたのか？
なかなか頑張っているぞ！」

「なになに？」

ドグッ

オッオッ

えん

びん

びん

おっ

やん

んん

その後も精液を搾り続けた結果...



「次は、外に出さないで……」

「はあはあ……お腹精液で一杯……」

ホッ

ク

フ

ク





「ア、ア、アのまま腫圧でえ、栓を抜くっつてんてん」

「んんんんん、精液が出たがっつてんてん」

アッ

アッ
アッ

アッ



「あふっっっ……ぬけたあああ、精液二杯でできたあ……」

びん

あ

あ

か

び

ん

あ



「ふ……ふふ、どうです？ネメシス、
この量……パケツ一杯になるぐらいですよ」

「あなたにこれを「えれますかあ？」

あつ

ふ
ふ

ふ

ふ

また

あつ



「なるほど大したものだ…といたいが、それは私も同じだよ」

「さっきから、子宮内の精液が栓を押し出してきているぞ！」

ゴッ
プッ
ゴッ

プッ

ゴッ

ゴッ



「さあ、結果を見てみましょう」

「良いだろう。これで、下僕がどちらの所有物が決着がつくな」

「で、結果が出たわけだが……まさかドローとは」

「最初から勝負しなおそうにも、男達はもう出ませんって並いてましたし……
ほんと役立たずなんだから」

「あー、いったいどうしたものでか……」



「…下僕よ、そのちんぽはなんだ…」

「うっ、いやはぢ、その…種うんだ」

「ば、化け物ですか？いくらなんでも大きくしすぎですよ、リト」





「ひゅっー!!!」
(ま、まさかリトのおちんぽに私達の子宮が反応して?)

ヒクッ

ピクッ

ピクッ



「あぐっー!?!」
(な、なんだー?! い、いきなり膣が)

ピクッ

ヒクッ

ヒクッ



（あ、ありえない……見ただけでこんな、反応するなんて）
（まるでお預けをされて涙をたらす犬みたいに、オマンコからお汁が……）

フツッ

ゴト

ズル

ゴッ

フツッ

ゴッ

フツッ

ズル

フツッ



「ちゅ、レロ、はあはあ！凄すぎ…いつもよりずっと大きくなったる…」

てんぱ

は

「ちゅる。へロ。へロ。ち、近くで見れば見るほどんでもないちんぽだ…」

「二人とも、待ってくれ…そんならされたらー」



「も、もう我慢できなっ…」

うあっ

びびる…びびる…

どろ

ジュ
ジュ
ジュ

ジュ
ジュ
ジュ

どろ

「あぶっ…あぶっ、射精たああ、んあああううう…」

「うあああ、これ…量、すすすぎて、飲み干せない…」



「次の対決は、どちらが先に下僕の子を孕むかで勝負しよう！」

「次の対決は、どちらが早くリドの子供を妊娠するかで勝負です！」

プル

プル

ハニ

ハニ



「アハハハハ」

「ふふふ、どうだ？下僕よ、今度は我慢できようか？」

「アト、射精したいのでしょう？いいですよ、オマンコでおちんぽ汁全部飲み干してあげますから」

くちゅ♡

アハ♡

アハ

アハハ

アハ

アハ



「下僕う、タークネスだけじゃなく私にもはやく突っ込んでくれえ」

「んひいーこれしゃいーいいいいい、おっきいおちんぽおおー」
「われひやううう」

おっきい

おっきい

ガッ

フリフリ

ジュウッ
グッ

ヒン
ニクニク



「で、射精を……」

ド
ン
ン
ン

「んぎっ！おとおお、
でかちんぽが中をぐちゃぐちゃにかき乱してらっつうー！
んま」

んま

んま

んま

んま



ビュ

「ぶりゅぶりゅで、粘っつい精液どぼとは溢れ出てるっつーっ！」

びゅーっ

びゅーっ

グビゅ

グビゅ

「じゃがいもっつーっ、多すぎて子宮に入りきれないいいい！」

びゅーっ

びゅーっ

〜数カ月後〜

「結局、孕み対決も引き分けですか……」

「ああ……二人とも「産目で孕んだから……」



「ダークネスよ、勝負はしばしおあすけとしよう」

ボ
コ
♡

ト
♡

「ええ、1人目でだめなら2人目で勝負すればいいです、
またリトに種付けしてもらわないとよ」

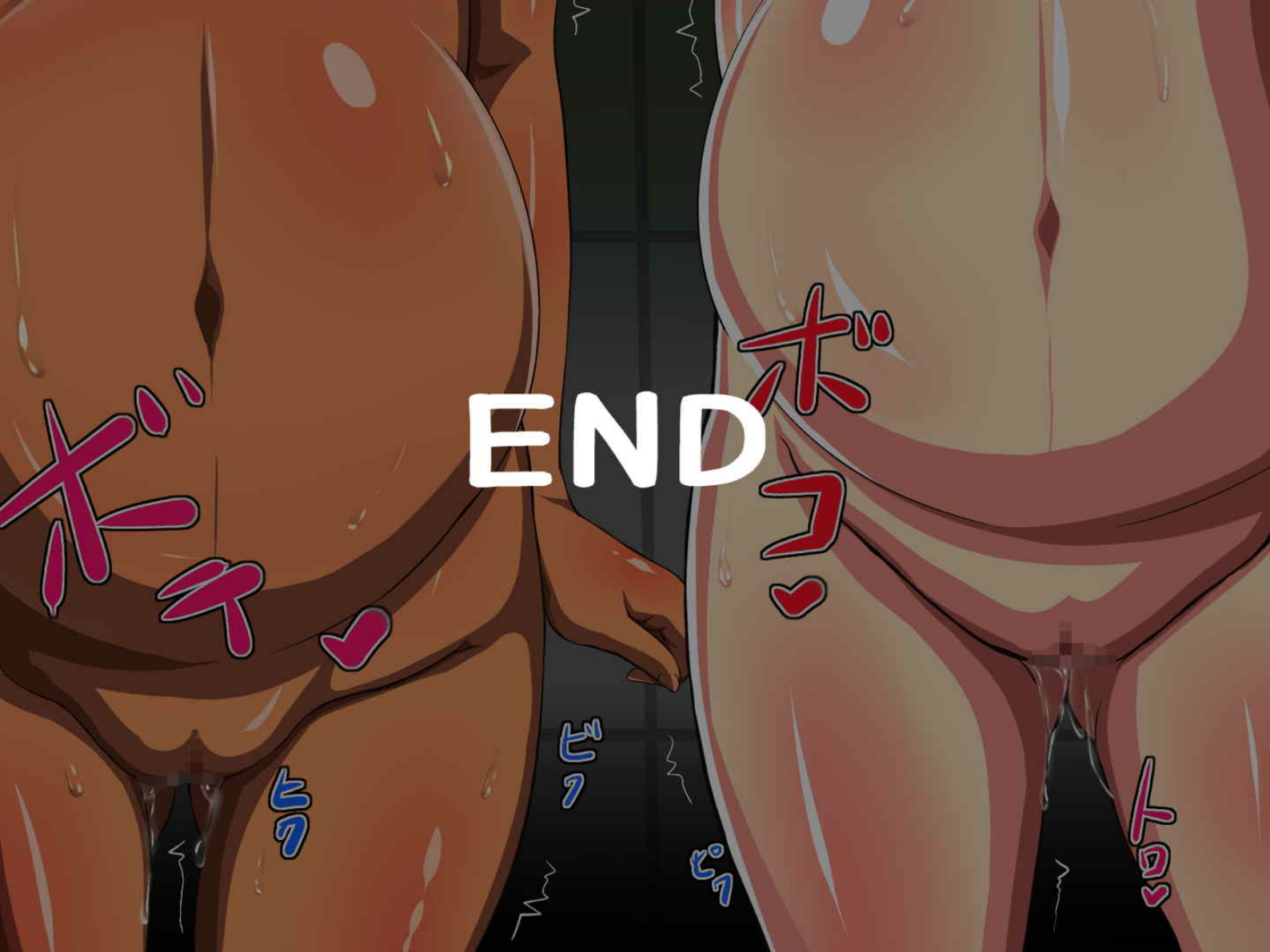
「ふふ、今からそのときが楽しみだ！」

ムク

ゴク

ピク

ボ
ク



END

ボッ
カッ

ボッ
コッ

カッ

カッ

カッ

カッ